

設楽発掘通信

No.69
令和4年
2月

令和三年度成果報告会のご案内

ります。期間内であれば、オンラインで随時見て頂くことができます。また印刷資料は、三月十四日以降であれば、町内各所でも配布予定ですので、よろしければ是非ご利用下さい。
(川添和暁)

設楽ダム関連の発掘調査も、今年度は無事終了しました。地域地元の皆様や、関係の皆様のお陰を持ちまして、今年度も注目すべき調査成果を得ることができました。まずはお礼申し上げます。

恒例の成果報告会『新設楽発見伝』は、今年度で八回目になります。新型コロナウイルス感染拡大状況により、今回もオンラインによる開催とな

令和3年度 設楽ダム関連発掘調査成果報告会

新設楽発見伝 8



令和4年 3月12日 (土)
午後1時30分より 配信開始
【配信予定は4月11日(月)まで】

アクセスはこちら https://www.youtube.com/channel/UCIhy9RDYYQngHh_MwJvkWpQ

印刷資料はこちら <http://www.maibun.com/modules/mydownloads/viewcat.php?cid=145&orderby=dateD>

オンラインによる開催です。

写真：大崎遺跡 水田関連遺構（鎌倉時代か）、下延坂遺跡 集石のある竪穴建物跡（縄文時代中期）

今年度の発掘調査成果を一挙に報告、調査で出土した遺物も紹介します。今年度報告書刊行の笹平遺跡の整理調査成果についても、併せてご報告します。

●●●●● 成果報告の内容 ●●●●●

令和3年度の設楽ダム関連の発掘調査について (藤原 哲：愛知県民文化局文化部 文化芸術課 文化財室)
 笹平遺跡の室内整理調査 (川添和暁)
 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査 (川添和暁)
 下延坂遺跡の発掘調査 その1～縄文時代晩期編～(渡邊 峻)
 下延坂遺跡の発掘調査 その2～縄文時代中期 集落編～(河嶋優輝)
 大崎遺跡の発掘調査 その1～中世 水田関連遺構編～(社本有弥)
 大崎遺跡の発掘調査 その2～縄文時代・弥生時代 集落編～(社本有弥)

*印刷資料の冊子自体をご希望の方は、3月14日(月)以降、愛知県埋蔵文化財センターのほか、設楽町教育委員会、国土交通省設楽ダム工事事務所、設楽町奥三河郷土館の各施設でも配布いたします。

主催  設楽町教育委員会

 国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所
 (公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
 愛知県民文化局文化部 文化芸術課 文化財室
 愛知県埋蔵文化財調査センター

お問い合わせ・企画担当
 愛知県埋蔵文化財センター調査課
 鈴木正貴・樋上 昇・川添和暁

<http://www.maibun.com/> 

大崎遺跡発掘調査

おおさき

発掘調査は無事終了し、水田状遺構と集落跡の全貌が明らかになりました。水田状遺構は調査区の斜面地を除くほぼ全域に広がっていることがわかりました(図3赤線内)。調査区の北西から流れる水路(図2青部)を中心として2〜3m四方の小区画の水田状遺構が南東方向に向けて展開しており、そのまま境川につながるようです。山間部では効率よく水を溜めるために、地形に合わせて小さい区画で造成されていたと考えられます。

続いて水田状遺構の下面で見つかった集落跡についてですが、竪穴建物跡は現在10棟ほど確認されています(図3青線内)。竪穴建物跡の様子がわかってきたのでご紹介していきます。竪穴建物跡の時期は縄文時代中期から弥生時代中期ごろまで様々でした。中でもいくつかの竪穴建物跡では廃絶してある程度埋まった竪穴建物跡の凹地を利用しているものがありました。以降は各時期の竪穴建物跡について見ていきます。

図2の赤く塗ってある竪穴建物跡は縄文時代中期後半(約五千年前)ごろのもので、この竪穴建物跡はよくある方形とは違い、五角形に近い形の竪穴建物跡と思われます(写真1)。黄色で塗ってあるものは縄文時代後期中葉(約三千八百年前)ごろのもので、遺構内からは注口土器の一部が出土しました(写真2)。青で塗ってあるものは縄文時代後期(約四千年前)ごろの竪穴建物跡です。他の竪穴建物跡から離れた位置で見つかりました(写真3)。緑で塗ってあるものは弥生時代前期後葉から中期前葉(約二千年前)ごろのもので、この竪穴建物跡は大崎遺跡で見つかった他の建物跡と違い、建物内に礫が多く出土しています(写真4)。最後は茶色に塗ってあるものは弥生時代中期後葉ごろ(約二千年前)です。この竪穴建物跡は小判型と言われる形をしており、周りに周堤を持っていました。

今年度の発掘調査もこれで終了です。3月に開催予定の成果報告会にて改めて調査についてお話しさせていただきます。ご期待ください。(社本有弥)

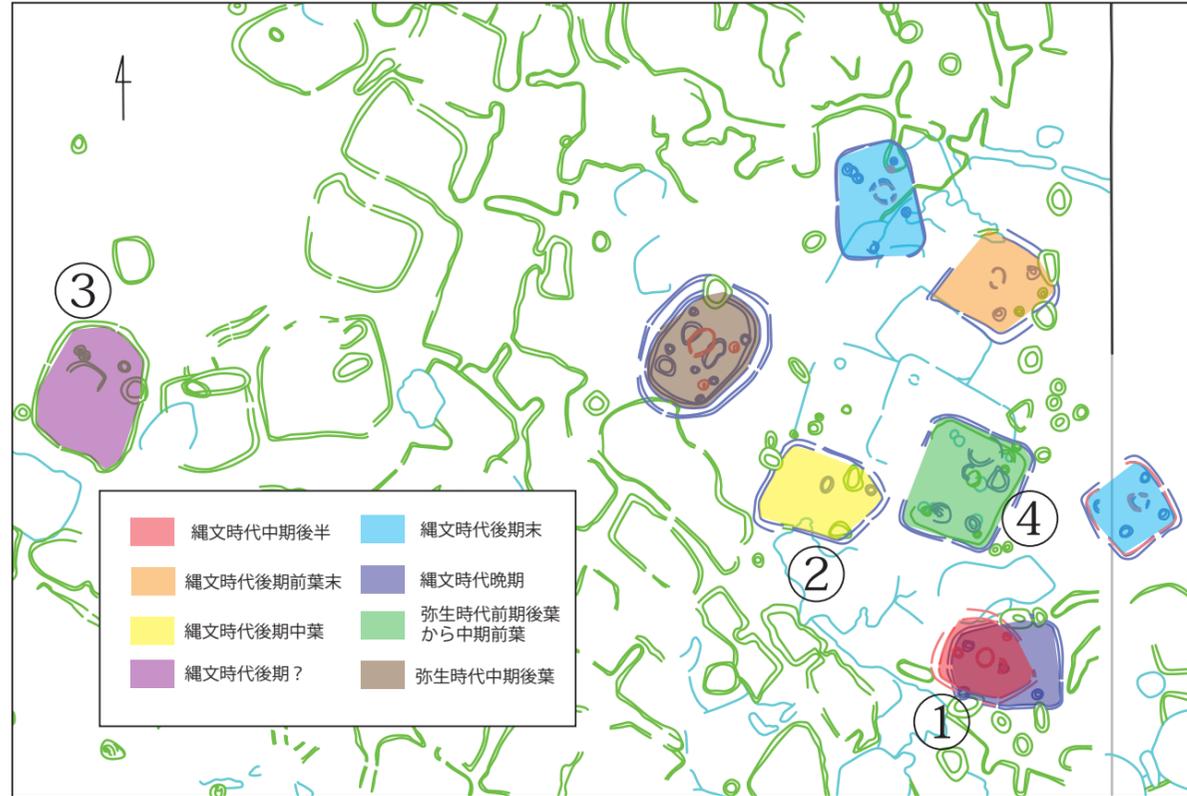


図3 縄文時代・弥生時代 竪穴建物跡の位置図



写真3 竪穴建物掘削作業(図3 ③)



写真1 竪穴建物跡、検出状況(図3 ①)



写真4 竪穴建物跡礫出土状況(図3 ④)



写真2 注口土器片(図3 ②)

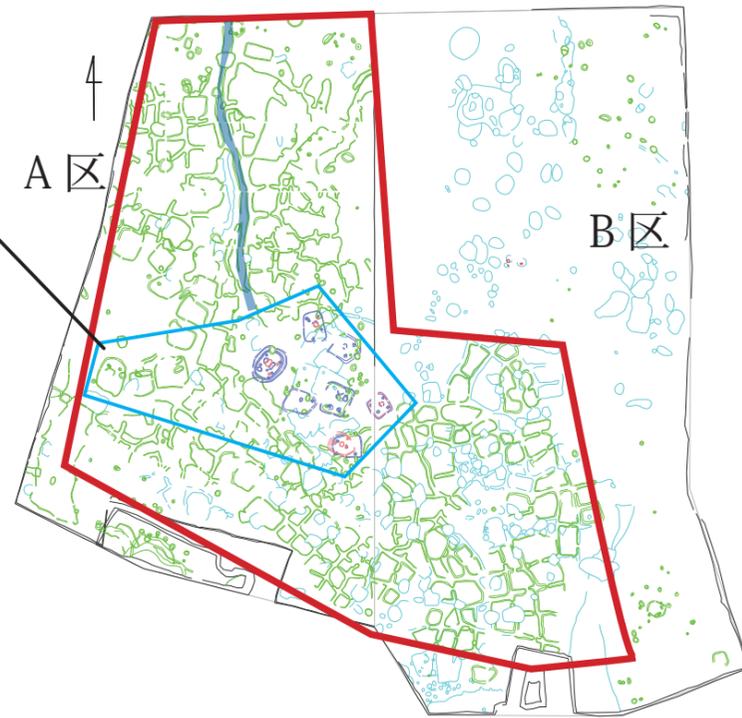


図2 大崎遺跡全体図(1/1000)

土層断面と遺構の関係



図1 土層断面と遺構の関係

大栗遺跡で見つかった謎の柱穴列について

二〇一五・一六年度に発掘調査した川向地区の大栗遺跡では、柱を据え付けるための穴（柱掘方と呼びます）が直径七〇センチメートルを超える巨大な柱穴列を三基確認しました。

柱穴列が見つかった位置は遺跡の北寄り、かつて宅地があった平坦面を造成するための盛り土を取り除いた下の遺構面を確認しました。この平坦面は、もともと北側の斜面地から一〇メートル程度の幅しかないと、南側に盛り土して幅を最大で二〇メートルくらいまで広げ、南端部には崩れないように石垣が築かれていました。こうして造成された平坦面は東側と西側の二か所あり、西側の平坦面（下図の平場1）は住居、東側の平坦面（同・平場2）は墓地として利用されていたようです。

発掘調査で確認した三基の柱穴列は、平坦面を保護する石垣よりも若干北側（山寄り）で見つかりました。柱穴の掘方は、まるで奈良時代の役所で見つかるような巨大なものなので（写真5）、最初は古代の遺構かとも考えましたが、土層断面を詳細に検討すると、中世頃とみられる水田面（断面図の緑色の層）よりも上から掘り込まれていることがわかりました。

今回、この大栗遺跡の発掘調査報告書を作成するにあたって、この柱穴列の位置を改めて詳細に検討した結果、東西に連続して築かれた三基の柱穴列はおおむね等高線に沿っており、特にいちばん西側の柱穴列1の西端が、石垣の位置とだいたい合うことが確認できました。

おそらくこれらの柱穴列は、狭い平坦面の谷側に盛り土をして造成する際、横に土留め用の板を渡して、さらにその土留め板を固定するために造られた柵列ではないかと推定するに至りました。つまり、一九五〇年代に杉の植林がなされる直前まであった宅地よりさらに古い時期にも、柵列と板で土留めをした平坦面があった可能性が高いと考えています。

さらに、柵列より古い時期の水田についても、大栗遺跡では土層断面で確認しただけですが、今年度の大栗遺跡ではようやく実際に発掘調査できました。大栗遺跡の土層断面では水田の畦と畦の間隔が二〜三メートルくらいしかないのと同様に、大栗遺跡の水田もやはり一辺が三〜四メートルくらいの小規模なものだったことが遺構として確認できたのです。おそらく中世には、この設楽町にあるあちこちの緩斜面には、区画の小さな柵田が広がっていた景観が復元できます。（樋上昇）

近世～近代の遺構 (S=1:2,000)

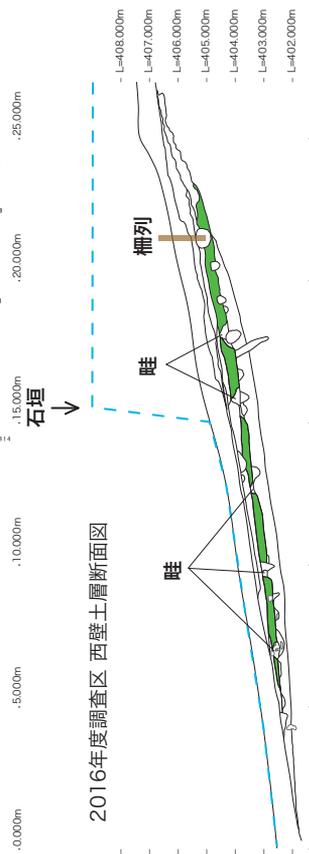


写真5 大栗遺跡の柱穴列2（西から撮影）

設楽発掘通信

No.69 令和4年2月号



編集・発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
 愛知県埋蔵文化財センター
 〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
 電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】
 ホームページ <http://www.maibun.com>
 Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>
 Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
 印刷・協力 株式会社イビソク